

結 草

kusamusubi

No.35

Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2022.03.01

コロナ禍から見える人間の闇

道因寺住職

相馬

豊

おはようございます。今年度も浄光寺さんの報恩講にご縁をいただきました白山市の道因寺の住職をしております相馬豊と申します。どうぞよろしくお願い致します。

いうものが出てきた時も他人事のように最初は受け止めていたわけですが、それが日々身近なところに迫ってきている。それを受けまして日常生活そのものが根底から覆されてきた。

昨年の浄光寺さんの報恩講が終わって、今年のこの報恩講までの間に生活が一変してしまいました。新型コロナウイルス感染症というものが全世界的にまん延し、感染が拡大していく、そういうふうになるとは予想もしておりませんでしたし、また中国で新型コロナウイルスと

そして、新しい言葉として、「新しい生活様式」とこういう言葉が現在使われています。またその新しい生活様式の在り様の中で特に「三密」という言葉が言われるようになりしました。お寺という場は人が集い、語り、お斎をいただくというか

たちで三密の制約を受ける場でもあります。私たちの日常生活に新型コロナウイルスが様々な影響を及ぼしているのが現実の事実そのものと言っているかと思っています。

コロナ禍

それで生まれてきた言葉が「コロナ禍」です。これは皆さんも新聞などでご覧になったことがあるかと思っています。「禍」というのは「わざわい」ということですね。新型コロナウイルスが私たちに、もっと言うならば私に禍を及ぼすもの、害を加えるも、そういうかたちの言葉遣いとしてコロナ禍という言葉が頻繁に使われています。

ではその禍です。なぜコロナウイルスが私たちの生活に禍を及ぼすのだろうか。そのことをもうすでに問題にされていた方がいらつしやる。それはお釈迦様です。

お釈迦様が在世の頃、禍ということについて語られた言葉が残され

ています。『仏説無量寿経』(大経)という經典の中で禍についてどのように伝えられています。

吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり。

『仏説無量寿経』

こういうお言葉を二千五百年前にもうすでにお釈迦様が語り掛けられていました。なぜ私たちにとって新型コロナウイルスが禍となるかということの原点です。

私たちの生活の中で、常に何を追い求めているかということがこの言葉から伺い知ることが出来ると思います。私たちの日常生活そのものは、何を追い求めているかといえど吉と福です。そのために一生懸命に働いていく。そして、私や私の家族の生活などの条件を整えていくということ。豊かな家庭生活を送る、豊かな人生を送る。その究極が「幸せ」という言葉遣いになります。幸せを追い求めて今日まで生き続

けてきたというわけです。吉と福を追いかけてきた私たちの日常生活の中に禍が入ってきたわけですよ、禍が。

禍というのは私と私の家族の在り方を混乱させるもの。あるいは自分にとって都合の悪いもの。害を及ぼすもの。脅かすもの。それが具体的に、新型コロナウイルスだということ。何を脅かしているかというところ。私たちの日常性。日常性を脅かす。だから「コロナ禍」という言葉が使われます。

そのコロナ禍ということで今私たちは生活を守るために何をしていますか、これもお釈迦様が私たちに先駆けて語られています。「競いておののこれを作す」、自分の幸せを守るためにおののが競い合っているわけです。

他者性の喪失

例えばこのことを『同朋新聞』(東本願寺出版発行) 五月号の記事に牧

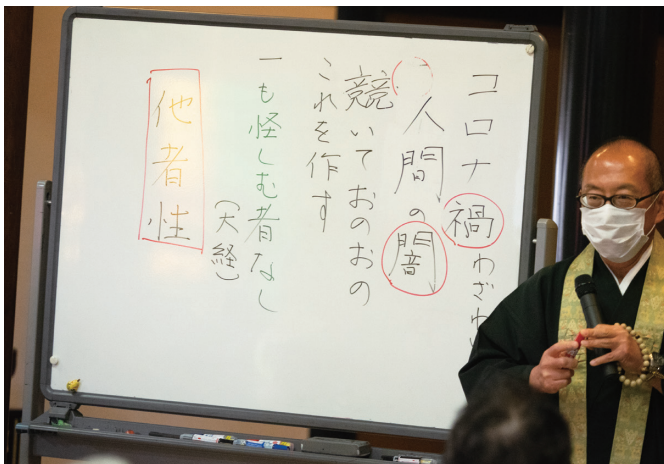
師の奥田知志おくだともしという方が次のように表現されました。記事になったのは五月ですが、インタビューを受けられたのは二月頃です。日本中から世界中から来ていた観光客が消えていった。その時にすでに奥田さんは私たちの在り様を指摘されていました。こういう言葉です。

新型コロナウイルスが感染拡大し始めたその時、まず最初にトイレットペーパーが消えました。そして次に何が消えたかといいますと、私も着用していますマスクです。今ほどこへ行ってもマスクは手に入る様になりましたが、緊急事態宣言が出た頃、なかなかマスクは手に入らなかったと思います。その後、もう一つ消えたものがあります。イソジンです。そういうふうには私たちの生活を守るために必要なものが次から次へと消えていった。トイレットペーパーが消えて、マスクが消えて、イソジンが消えた。

「競いておののこれを作す」。買い求めたということです。もつと言

えば買い求めただけでなくて買占めです。自分さえ良ければということです。自分さえ良ければと、他の人の存在が見えなくなる。

そういうあり方がもうすでに經典の中で「吉凶禍福、競いておののこれを作す」という言葉で私たちの日常生活の在り様が言い当てられている。



続いて奥田さんはこういう言葉を付け加えました。

トイレットペーパーが無くなったのはありません。無くなつたのは他者性です。

相手を思いやる心。相手の存在を大事にしていく心。そういう人の存在が消えていったのだと。それがコロナ禍によって今私たちの前に突き付けられている大きな問題ですと。

人と人との関わることがなかなかできなくなった。コロナ禍によって外出自粛、多くの方々が家庭内に籠るようになった。それはもう共通認識です。共通の体験をしました。人に会いたければどうにかすることが出来ない。そういう生きづらさ、苦しさも今私たちは感じている。そしてその中で自分たちの幸せを守るために、競い合ってきた私たち。

私と私の家族の幸せを守るためなら、やむなくかもしれないが自分さえ良ければいいという心がまず出てきたということです。そして他者

の存在が見えなくなってきた。つまり他者性が奪われてきた。

人間の闇

そしてもう一点、これは二月二日の『中日新聞』でした。匿名の記事の中にこういうことを書かれた方がいました。

人類には邪悪なウイルスに対抗できる免疫が備わっている。邪悪なウイルスとは新型コロナウイルスではなく、差別と偏見というウイルスです

こういうことを匿名の方で指摘された方がいる。邪悪なウイルスとは新型コロナウイルスではないと。邪悪なウイルスとは私たちの中に潜んでいる差別と偏見というウイルスです。今、石川県内では感染者数が七九三名ですか。治られた方が七二二名。(令和二年十月)

しかし感染者が出た時、私たちはどのようなことを感じたでしょう

か。色んなことをこの新型コロナウイルスによって感じたことだろうと思います。一つは不安ということ、もう一つは恐れです。不安と恐れということで非常に怯えた生活が始まりました。今も、感染者はやはり出ていますが、少し落ち着いて物事が見られるようになりました。しかし、当初はそういうことが見えなくて医療従事者に対する偏見、感染者に対する差別行動、様々なことが報道を通して、また風の噂を通して色んなことを見聞きするようになったと思います。

つまり、この新型コロナウイルスによって平生は見えなかった人間の闇が浮き彫りになった。コロナ禍というのはただ禍をもたらしただけではなくて、私たちに何を教えてくれているかという、人間の闇です。人間の闇というものを教えてくれている。普段の何もない穏やかな時、そのことは覆い隠されています。ところがコロナ禍によって今改めて私たちが目にしたのは人間の闇と言っていると思います。

そのことを伊藤元^{いとうはじめ}という言葉で私たちに語り掛けられました。

つらく苦しいことは不幸なことではなく、それを通してのみ見えてくる世界がある。

という言葉です。新型コロナウイルス、私たちにとっては禍です。そしてこの禍の元での生活は苦しいし、辛いです。外出もできない、人に会うことも出来ない、旅行にも行けない。様々な制約を受けながら日々の生活をしている私たちですから本当に禍といっているのです。

けれど伊藤さんはそれは「不幸なことではなく」と言いました。そして「それを通してのみ見えてくる世界がある」と。コロナウイルスを通してのみ見えてくる世界があると。見えてきた世界は何かというと闇です。私たちが抱え込んでいる恐ろしい闇という病いです。

そのことをもうすでに私たちに伝えている親鸞聖人の言葉があります。

こちらの報恩講でもお勤めされた『正信偈』^{しょうしんげ}です。正信偈の中にこの人間の「闇」ということを親鸞聖人はこういう言葉で伝えていきます。

貪愛瞋憎之雲霧^{とんないしんそうしうんむ}

『真宗大谷派勤行集』
(赤本) 一〇頁

正信偈の中に出てくる言葉です。まさに私たちがお勤めをしているこの正信偈のお言葉。親鸞聖人が亡くなられて七五〇年経っています。私たちからみれば過去の人です。しかし、過去の人が残した言葉が文字となつて、声となつて私たちはお勤めというかたちで目にします。そして自分の声としてそのお言葉を読んでいます。過去の人だけと私たちがその書かれた言葉を見ているということは、既に亡くなったはずの親鸞聖人が目の前にましますということです。私の目の前に親鸞聖人がまします、それが正信偈に残されているお言葉です。

親鸞聖人は、人間にはどうしても

治すことが出来ない厄介な病を持っていますよと。その病が人間の闇と
いうものを作っていますよと。

一つは貪欲、貪愛と呼ばれる欲です。二つ目は瞋恚という怒り、そして三つ目が愚痴。これらが人間の闇の大元。人間には治すことが出来ない病がありますよと。治し難いというんです。いくら良薬を飲んでも良医の所に行ったとしても治らない一番大きな病があると。それが欲と怒りと愚痴。このことが私たちの闇そのものであり、病そのものです。

びすむさく

私たちはコロナ禍によって不自由な生活を送ることによって恐れを抱く、いつまで我慢をしなければなら
ないのだろうかという怒りです。怒りがあります。もう耐えきれない、我慢の辛抱の限界です。そういつて不安と恐れの中で会食をしてみたり、発散しなければならぬわけ
です。そして欲。欲が出ます。生きづらさの中で怒りがあつて欲です。欲はどういう言葉がでてくるかという
と新型コロナウイルスに対応するワクチンを早く作ってほしい。あるい

はコロナウイルスの新薬を早く作ってほしい。ワクチンがあれば、薬があればと、こういう欲がでてきます。しかし、なかなかそれが実現しないから愚痴るわけです。

この新型コロナウイルスですけれど、私たちに害は及ぼすもの、すなわち禍です。禍ですけど、今まで見えなかった私というものの中にある治し難い病を教えてくれていると思いませんか。今日日本中が闇に包まれているわけです。

だからそのことを奥田知志という人は「無くなったのは他者性です」と、他者性が失われたといわれた。自分さえ良ければいいとおの競い合つて、自分の日常性を大事にしていく。お釈迦様は「吉凶禍福、競むものなきなり」と。「一も怪しむものなきなり」、おかしいな、と思う方がいないというのですね。大事になきやいけないものが見失われてしまつて、他者性が失われて、人とのつながりが奪われていく。

悪業を転じる

そのことを私たちが子供の頃読んだ芥川龍之介の『蜘蛛の糸』で改めて思い知りました。今改めて芥川龍之介の蜘蛛の糸を読んでみると、今私たちが生きている時代そのものを表していると思います。

地獄に犍陀多という罪を犯した人がいた。その上には極楽という世界があつて、お釈迦様が歩いていたら一匹の小さな蜘蛛を見つけた。足元に踏みつけそうになった。踏まないでおこうと思つた時に、ああ一人の犍陀多という人がこの蜘蛛の命を助けたな、と。

それで極楽から地獄に蜘蛛の糸を垂らした。地獄という生活の場で悩み、苦しみ、もがきながら生きている姿に蜘蛛の糸が届いた。本当に切れそうな蜘蛛の糸を掴んで犍陀多は上へ上へと登っていく。途中で下を見ると、我先にと、どんどん、どんどん人が登つて来る。その時、叫びましたよね、「この糸は私のものだ」

と。じゃあ、蜘蛛の糸はどこで切れたのでしょうか。どこで切れましたかね、蜘蛛の糸は。犍陀多の下で切れたのではなくて上で切れたのです。

蜘蛛の糸をこの時代によく読み返してみると、これは私の在り方そのものを表しているのではないでしようか。元の生活を取り戻すために我先にと競い合っている私たち。私さえ良ければと、困っている人、弱き人、小さな人がいることに目がいけない。いつの間にか自分さえ良ければいいという所に立っている。そういう所に立てば立つほど人の存在が見えなくなる。そういうことが私たちの人間が抱えている闇を教えてくれるのです。

確かに新型コロナウイルス感染症は私の生活にとっては禍だし障害であるからこそ感染予防に徹しなければならぬ。しかし、その感染予防に徹しながら、もう一度大事にしていかなければならないことが次から次へと見えてきたということです。

そのことも親鸞聖人はこういう言葉
でおさえてくれています。

真理の一言は、悪業を転じて善
業と成す。

『教行信証』行巻

「真理の一言」、誠の言葉ということ
です。「悪業」、私にとって都合の悪い
ことです。私にとって都合の悪い
もの。現代において一番都合の悪い
ものは新型コロナウイルスであつた
り、今ですと熊もですよ。熊も大
変な時代に生きていると思います。

く さ む す び

悪業、都合の悪いものです。その
都合の悪いものを私たちはどうした
らいいのかというと、無くしたい。
消したいのです。ところが親鸞聖人
は消すとは言っていないです。「転じ
て」なんです。普通なら「悪業を消
して善業と成す」です。嫌なものは
消してしまいたい。新型コロナウイルス
が早く収束して元の生活に戻り
たい。不安や恐れを取り除く。しか
し、親鸞聖人の言葉遣いは「転じて」
です。無くすのではないのです。

「転じて」というのは何を言ってい
るのかといいますと、道しるべとい
うことです。都合の悪いもの、邪魔
なものは、私が人間として生きてい
くための道しるべを教えてください
なのです。道しるべが善業となる。
この見方ですよ。

私たちは悪いものは無くして善い
ものになってほしい。無くすという
ことを考える。しかし、親鸞聖人は
そうではないんだ。悪いことが改め
て自分の道しるべになる。つまり新
型コロナウイルスということは私の
道しるべ。普段当たり前だと思っ
ていたことや見失ったことをもう一度
教えてくれる大事な道しるべなんだ
と、こういうことを教えてくれるの
だということです。

そのことをです先だって、敗戦
を経験された一人の男性の方が教え
てくれました。今年で戦後七十五年
経ちましたけど、今の自分の息子や
孫たちの日常生活を見てみると、ど
うも私が過ごしてきた日々と大
分違うという感覚を毎日感じていま
す。敗戦から今日までずっと生き

続けてこられた。その方が歩まれて
来られた人生というものと息子や孫
達の日常性を見てみると、どうも違
うというんです。

それでお聞きしたんですね、どう
いうことが日常感覚から違うという
ことを感じますか？そしたらその方
はこう言いました。敗戦を経験して
今日まで生き続けてきた時は、生き
るために働いたと。生きるために必
死になって働いたと。ところが、息
子や孫達の日々の姿を見てみると何
か働くために生きている。こういう
ふうに見えるというんです。皆さん
にはこの言葉どういうふうに響き
ますかね。生きるために働いた、今
は働くために生きている。

最初はなかなか難しいな、と思っ
ていたんですけど、時間が経って
改めて私たちの今生きている時代
の背景を考えてみると、そうでない
でしょうか。生きるために働く。自
分が働かなければと家族や私を支え
てくれた人達のために一生懸命に働
く。その人のことを思うと生きる意

欲が出てくる。

ところが現代はどうでしょうか。
何のために働いているのでしょうか。
それは確かに生きるためになっ
ているけれど、よくよく考えてみる
と、そこに私を支えてくれた人や家
族の顔が見えていますかね、私たち
は。

何か自分が所属している組織のた
めに働いている。組織の利潤を上げ
るために働いている。あるいは同じ
職場内では競い合って蹴落とすこと
だけが求められている。利益、利潤、
まさに損得で見ていく在り方。それ
が以前「勝ち組」、「負け組」という
言葉になりましたが、何かそういう
ところでしか私たちは生きられなく
なってきた。まさに人間の存在が見
えなくなったのがこの言葉ではない
でしょうか。

消えた宗教

私たちは都合の悪い悪業を無くそ
うとします。そうするとこのコロナ

禍によってもう一つなくなつたものがあります。それは宗教です。日本から宗教が消えてしまったということです。コロナ禍によって宗教が消えたのです。もともと宗教というのは私たち一人一人の人間の生き方を問題にし、そしてその生き方の教えに出あつていく、そういうものが宗教でした。ところがコロナ禍によって日本中から宗教が消えてしまいました。

寺社で一斉に何をしたかということ。コロナを無くすという祈願法要です。神社仏閣では除災というかたちで非常に多くのことをやっていますよね。宗教が無くなつた、つまり都合の悪いものを無くすのが宗教だと思われるようになった。本当の意味での宗教が何か、見えなくなつた。つまり私たち日本人が宗教を失つた時代でもあります。どこかで私たちも同じようにコロナを無くす祈願の方に向かつているような気がしませんか。

門徒さんがこんなことを言いまし

た。どうして浄土真宗でははコロナの対策としてそういう祈願法要をしないのですかと、こう言われた。門徒さんがいましてちよつと驚きました。それをやったら真宗ではなくなります。そういう自分の都合を叶えてくれるものが宗教になつてしまつたら、それは真宗ではなくなります。しかし、そういうことを願わずに出来ない人間の弱さです。私たちの人間の弱さです。そういうものも見えてくるわけです。

それは先ほどの欲です。欲なんです。つまり都合の悪いものが無くなるのではなく転じていく、道しるべです。コロナ禍によって人間の闇である、欲と怒りと愚痴がまん延するような日々の生活の中にあつて、それを道しるべとしても一度私たちが、自分の今日までの人生の歩みを点検することができる時間なのでしょう。コロナ禍は。

もっと言葉を変えて言いますと、この時代だからこそ私は人間としてどう歩んでいくのですかと、それがコロナ禍から私たちに問いかけられ

ている中身でないでしょうか。人間の闇で覆いつくされている私たちに。だからこそあなたは人間としてその闇をどのようにして生きていくのですか。目の前に人がいますよ。小さき人、弱き人がいますよ。そういう人達と支え合つてどういう社会を作っていくのか。まさに私たちが今まで聞いてきた、聞く姿勢が問われていると思います。私たちの生き方、そのものが問われています。

坊守のことば

私も、道因寺というお寺を預かつていながら、三カ月間、仏事や法要は一切執り行わなかった。ただ、朝夕のお勤めだけは本堂で勤めました。その時、妻である坊守がこんなことを言いました。「お寺の本堂って一体何のためにあるのですか？」素朴な問いかけを受けました。ハッとしましたね。私もコロナ禍を言い訳にして三密になるからと仏事を執り行わない。多くのご門徒さんや世話方や総代からも、止めておいた方がいい

よと言われるとその流れに乗つてしまいました。改めて坊守である妻の言つた言葉にハッとしました。一体何のためにお寺の本堂があるのだろうか。

そして六月二十八日、親鸞聖人の御命日である二十八日。ここで再び、仏事を再開しました。六月の初め、ご門徒さんのお宅一軒一軒に、また御命日の法要を始めますからという案内を持つて行つた。そして当日の二十八日は朝からソワソワしていました。こんな状況の中で何人の方がお寺の本堂に足を運んでくれるかなと。もしも誰も来なかつたらどうしよう。やつぱり心配事が出てくる。だからソワソワ、ソワソワです。落ち着かなかつたです。そして一時半の勤行の時間がだんだんと近づいてくると余計にソワソワします。でも一時をまわると駐車場に車が停まる音、そしてお寺までのつながる道です。すね、歩いて来られる靴の音、そしてお寺という本堂で久しぶりに見る顔。にいつの間にか小さな本堂が満堂になっていました。そして、そ

こで改めて『正信偈』の同朋唱和というかたちでみんなで声を揃えて正信偈のお勤めをした時に思わず涙が出てきました。本当になんか嬉しかったんです。

人が集うということはただ集ったのではない。私自身もいつの間にか当たり前になっていたのです。案内をすればお寺に足を運んでくれる人がいると決めつけていたのです。しかし、坊守から「お寺の本堂は何のためにあるのですか」と言われた時にハッとさせられたんです。そして、人が集うてきた。どういう思いで来られたのかな。みんなマスクはしておりました。感染予防に気を付けてがら来られた。

今日の皆さんもそうだと思うのですが、なかには「お寺は三密になるよ、大丈夫ですか」と家族に言われた方もいるでしょう。でもその心配をおしてでもお寺の本堂に足を運んで来た。その重みです。そういうことをいつの間にか当たり前と思っていたが、実はその当たり前を支えて

いる大きなものがあるんだ。そのことを改めて教えられました。人が集うことは当たり前だけど、人が集う時にはそれぞれどんな思いでここに足を運んできたのか。

今まで大事にしなければならなかったことを大事にしていなかった自分の姿、そういうことがコロナ禍によって見えてきた。だからコロナ禍というのは確かに禍ですけど、一つのきっかけになるということなんです。現実には私の生活を脅かす厄介なもの



す。しかし、それが親鸞聖人の言葉でいう「転じ」て、道しるべになったとき、今まで当たり前だと思っていたことを問い直すきっかけとなる。きっかけなのです。何を大事にしなければならなかったのか。

三カ月間、今もそうですけど、朝昼晩と家族で食事をする機会が増えました。その時も見えてくるものがあった。一番困ったのは妻だと思えますね。朝昼晩の食事を作らなければならない。妻はこう言いましたね、朝、朝食を食べているときにお昼の献立を考える。昼食ベ

ていてる時は夕食は何を買いに行けばいいのか考える。私はそういうこと一切思いませんでした。一切そんなことにも気づかなかった。そして一番気づかされたのはたま

言いました。「ごめんね、ありがとう」と。私は妻が家族の食器を洗っている時、たまにありがとうと言います。でもほとんどの時は無言です。ところが妻は私が食器洗っている時に「ごめんね、ありがとう」と言ったんです。これも大きなショックでした。妻に「ごめんね」と言わせている自分の姿です。

なぜ「ごめんね」を言わなきゃならないのでしょうか。何かそこに男性というものの体質ですよ。いつの間にか知らず知らずのうちに日常性の中で培ってきてしまっていた。振り返ってみればこの人と一緒に共に歩んで行こう、だから結婚を申し込んで、そして一緒にその道を歩んできたはずなのにいつの間にかそのことを忘れている。そして「ごめんね、ありがとう」と言わせている自分。なんか恐ろしくなりましたね。目の前に家族で一番大切な人がいながら、その人を軽視している私の姿です。目の前に大事な人がいたにもかかわらず、その人を軽視している。そして「ごめんね」と言わせている

私。私自身も闇を抱えているんだと、そういうことがですね、コロナ禍によつて明らかにになりました。私の中にある恐ろしさ、闇、病。その正体が暴かれました。

人間としての出発点

親鸞聖人が言われる「真理の一言は、悪業を転じて善業と成す」。都合の悪いものが、私の生き様、もつと言えれば人間としての生き方を教えてくれる道しるべとなる。そのことを冒頭で申しました伊藤元さんは「つらく苦しいことは不幸なことではなく、それを通してのみ見えてくる世界がある」、こういうお言葉で親鸞聖人のお言葉を自分の言葉として語り掛けてくださいました。

本当にこのコロナウイルスがきっかけとなって自分の正体が暴かれていく。一番暴かれたくない自分を見るということ。それが宗教そのものではないでしょうか。それが真宗なんでしょう。真宗の教えは自分に関

わる様々な人を通して、現実を生きている人の関わりの中で、自分の人間としての在り方、生き様、それらが教えられていく。

親鸞聖人は九歳で出家、得度されました。元号で言いますと養和元年です。西暦で言いますと一一八一年、京都は大飢饉に見舞われていた。前年は全国的に地震や飢饉が起こっていた。京都に鴨長明^{かものちやうめい}という方がおられました。その方が『方丈記』^{ほうじょうき}でこう書いています。

京都を流れている鴨川の川辺にはおびただしいご遺体が山積みになり、道端には行き倒れたご遺体が放置されていて、小動物がそのご遺体を食い散らかしている。そして京都中が死臭で覆われている。

こういうことが『方丈記』の中で鴨長明が書いています。

その時、親鸞聖人は九歳です。少年は何を見て、何を感じたのでしょうか。私たちの時代でいうならばコロナ禍です。これを見たわけです。

そこに不安と恐れを感じながら一人の少年は道を求めることを選んだのです。ここが大事なことではないでしょうか。

不安と恐れの中で道を求めることを選んだ。出家、得度です。道を求める。自分が人として生まれてどう生きていくのか。その人間の現実の姿を見た時、そこにこそ生まれたことの意味を、生きることを訪ねていく道を選んだ。これが九歳の少年の生涯の出発点です。

私たちでいうならコロナ禍元年、ここが私たちの人間としての出発点なのです。改めて人に生まれたこと、生きることをコロナ禍が私に尋ねている。真理の一言、「南無阿弥陀仏」、教えの言葉が今私たちにあなたは人としてどう生きていくのですかと尋ねている。またそのことを共に訪ねていきましょう。そうことを問いかけているのが現代という時代からの私への質問状ではないかと頂いております。本日はようこそ報恩講にお参りくださいました。ありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は令和二年十月十八日、浄光寺「報恩講」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「お太子さん」(聖徳太子御忌)

日・令和四年三月二十一日(祝)

時・午後一時～

講師・木村宣彰師(鈴木大拙館館長・大谷大学名誉教授)

「きこまいけ」

日・毎月二十八日

時・午後二時～

※十二月～二月は冬休みをいただいておりますが、三月より再開いたします。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

「きこまいけ」ではみんなで『正信偈』を学んでいます。(教え・勤行作法など)みなさまのご参加をお待ちしております。お気軽にどうぞ。



WEB サイト